

児童館等のあり方検討会の主な意見

1 これからの児童館・学童クラブの役割と目指すべき方向

- 地域の子育て支援の拠点としての機能の強化
- 地域の人材や NPO 等との協働等の推進
- 地域のニーズや施設の状況に応じた特色のある運営の推進

2 ニーズに応じた特色のある児童館づくり

(1) 乳幼児親子の利用促進に向けた取組み

① 専用スペースの整備

- ◎ スペースに余裕がない館では、学童クラブを学校に移設することができれば、空いたスペースを乳幼児親子の専用スペースとして活用することができる。

② 一時預かりの実施

- ◎ 児童館で実施するとすれば、親の子育て力を高める入口として、利用者の少ない午前中に学童クラブの育成室を利用して行うなど、児童館らしいやり方で実施することが望ましい。

③ センター機能の設置

- ◎ 乳幼児親子向けプログラムの研究や職員の計画的なスキルアップを推進するためのセンター的な機能が必要である。

(2) 学童クラブと小学生の居場所づくり

① 安全・安心な居場所の確保

- 子どもの自立という面から考えると、成長とともに自主性に任せた方が良い部分が多くなっていく。一方、子どもの安全が脅かされるという事態が進行している。こうした中、子どもの自由意志や生活圏の拡大を大切にしながら、児童館・学校など全体で、これまでの蓄積や経験をふまえながら、子どもの居場所を再構築する必要がある。
- 子どもの成長・発達を考えると、とりわけ高学年では、多少危険はあるかもしれないが、児童遊園、公園や校庭開放などと連動しながら考えないといけない。
- 児童館の出前機能のようなことも考えられるのではないか。
- 学校だと校庭などの広い場所で遊ぶことができ、教室も利用できるので、学校内に移すのが良い。
- 子どもたちの安全な居場所ということでは、緩やかな監督があればきちんと遊ぶことができると思う。

② 児童館・学童クラブと学校における居場所事業との関係

- ◎ 「教育」とともに、養い育てるという「養育」の視点も大切である。

- これまでに児童館・学童クラブが取り組んできたことにしても、「地域子ども教室」の取り組みにしても、共通するものがあり、一緒にできるところはたくさんあるようなので、その議論を詰める必要があるのではないか。
 - 学校と校内学童クラブでは、双方にこうしてほしいという考えがあると思うので、そこから話し合いを始め、教育立区の視点から連携して取り組んでいけることもあるのではないか。
 - 子ども同士の喧嘩やトラブルなどに対応するため、子どもの居場所にはスーパーバイズする人がいることが望ましい。
 - 学童クラブと「居場所づくり」がもう少し連携をとるための提案(職員の派遣など)が必要だ。
 - 将来的に「地域子ども教室」と学童クラブがお互いに何らかの形で連携・融合していくことは望ましいことだが、この「地域子ども教室」で生まれている様々な事業は、責任の所在がはっきりせず、一貫性がない。
 - 学童クラブは、学童クラブ事業運営要綱に基づき、年間計画を立てて、年・月・週・日単位でプログラムを作成し、子どもが活動できるようにしている。児童館では、一人ひとりの子どもの自発性や可能性が拓くように支援を行っている。また、家庭でそうしたことができないときには、家庭に対する支援も行っている。
 - 生活の場としての学童クラブと教育的立場を配慮したプログラムを意図的に行う社会教育の場としての「地域子ども教室」という対極的立場にある事業が両方存在しているということが大切だ。
 - 学童クラブは、家庭の安らぎを与える場だと考えているので、放課後の居場所がそのまま学校で、内容も学校の延長したものがそこにあるということでは、不安を覚える。
 - 子どもの生活というのは、予定しないことが起こるから面白いのであって、むしろそういったことに意味があると考え。そうしたことが多様に起こって、そこで考えたり苦労したりするということが、子どもの育ちの中になくてはならない。
 - 単なる合理性や安全性だけから、学童クラブを学校内に移すことは間違いだ。子どもたちにとっては、学校とは全く異質の空間になっているからこそ、学童クラブが存在しうるのであって、ただ単に場所が空いているからそこに移せば良いという単純なことではない。
- ③ 学童クラブの育成時間の延長等へのニーズの対応**
- 子どもの視点から見て、現時点では、何時までが適正なのか考えることが必要だ。
 - 子どもは家庭で育てるのが基本だということを忘れてはいけないと思う。区が際限なくニーズに応えていくことは間違いだと思う。
 - 時間延長については、午後6時30分までという意見が出たことを記録し、まとめの段階で判断する。
 - 年末保育を実施する場合、子どもの自力通所という面や保護者アンケートの結果からは、拠点実施というやり方では厳しいと考える。現時点では、サポート体制を充実させるやり方の方が現実的ではないか。

(3) 中・高校生の居場所づくりと自立応援の推進

- 趣味のバンドをやる場所、大人あるいは学校から離れた無料で利用できる息抜きの場所、安全に守られた場所が中高校生にとっては必要かもしれない。
- 何時まででも友だちと話していたい年頃なのに、利用時間が7時までというのは早すぎると思う。時間延長については、NPO などと協働して実施することが考えられる。そうすれば新たに施設整備を行なう必要がなく、時間の住み分けにより解決できるのではないかな。
- ゆう杉並のように職員がポイントを押さえ、子どもをフォローしてあげることが必要だ。
- サポーターをNPO なり民間から募って、大人と一緒に何かをするという機会を増やしてあげると、大人との接点ができる運営が実現されると思う。プログラムの充実も必要であるが、もう少し地域の大人に触れるということがあっても良いのではないかな。

(4) 障害児の放課後支援

- 児童館任せではなく、障害児向プログラムの中に、支援団体や障害児の希望を加えていくのも良いと考える。
- 全体として事業や企画を専門団体に委託するなどは、かなり協働を進めていく可能性のある領域だと思う。
- 1学童クラブあたり4名という障害児受入れ枠を弾力的に運用する方向性は考えられないかな。

3 区民・NPO等との協働の推進

- 児童館でのいろいろな仕事を全て、委託であるとか協働など一足飛びに実施しようとするは大変だ。ゆうキッズ事業などをモデルケースとして、徐々にはじめて行く方法があるのではないかな。
- まずは、児童館機能の一部を任せ、その積み重ねでより広い範囲を任せることは可能かもしれない。
- 児童館が旗振り役として、地域の関係者と行政の関係者が集まる「地域子育てネットワーク」については、民間の事業者やNPO 等がやるのがふさわしいのかどうかという議論は必要ではないかな。
- 現時点で、区が民間に運営を任せ、完全に手を離してしまうことは考えられない。
- 「すぎなみ地域大学」の卒業後に、区として活動の場(放課後子どもプランなど)を紹介できたら良いのではないかな。
- すぎなみ地域大学に、NPO 法人等の力量を高めるようなプログラムを取り入れることも考えられる。
- 地域により協働できる内容などが違うと思うので、各館にコーディネーターのような人々を一人ずつ配置してはどうだろうか。